

ココローム
COCOroom

とうほくしゅうちょうじやしんぶん
東北出張所新聞



①

FREE
+
おきもち

またどこかでね

発行：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋 東北出張所

とくしゅう：福島から いまおもうこと p1~6

●review1 釜ヶ崎から 便りにも似た p7~10

●review2 またどこかでね 事務局から p11~12

福島から いまおもうこと

メール 白河在住 長谷川祐子さんから

From Yuko Hasegawa

To kodomo-fukushimaml

日付 2011年11月18日 10:30

件名 [kodomo-fukushima.6050] 寄りかからず

「寄りかからず」

もはや

できあいの思想には寄りかかりたくない

もはや

できあいの宗教には寄りかかりたくない

もはや

できあいの学問には寄りかかりたくない

もはや

いかなる権威にも寄りかかりたくない

ながく生きて

心底学んだのはそれぐらい

じぶんの耳目

じぶんの二本足のみで立っていて

なに不都合のことやある

寄りかかるとすれば

それは

椅子の背もたれだけ

詩人・茨木のり子さんの

『寄りかからず』

震災以前から、何かどよーんとした生き難い時代を生きながら、バイブルのように大切にしてきた詩です。

水俣白河展、20日まで、白河市のマイタウンで開催しています。チェルノブイリで、見捨てられた200万人。

情報を取れる時代ですから、自分で一步を踏み出すことはできるのではないのでしょうか？あたりまえの権利を求めることは、本当にできないことでしょうか？

いま、おもうこと

MIZUE. N

(みずえ えぬ)

主婦44歳。長野県出身。2009年4月に福島市へ転居。2011年3月11日被災。娘が二人。二女（小5）は原発事故の影響を恐れ疎開させているため家族バラバラで生活中。子ども福島、知識普及セクション。

先日、フランスの雑誌の取材を受けた。「福島第1原発の事故で福島市の土壌汚染はチェルノブイリ原発の事故後の退避地区と同等以上だということがわかったから、子どもの健康が心配だ。高校生の娘も避難させたいけれど、本人が転校を嫌がっているから避難できない。」と話したら、怪訝そうな表情をされたので、「フランスではそういうのは変ですか？」と逆に尋ねてみた。

フランスでは、親が決めたことに子どもが従うのは当たり前だと言われた。親が「転校する」と決めたら子どもが泣こうが喚こうが「転校する」。フランス人は昔から国を信用せずに生きている国民だからだけ、子どもを守るのは親の責任だと。

たしかに子どもを守るのは親の責任だと思う。「今無理に転校させて娘さんに恨まれても、10年後、きっと、感謝されるはず。」とも言われた。それはわかる。でも、首根っこをつかまえてまでもそうできないのは何故だろうと、高校生の子どもを持つ友人に相談した。彼女は最初、聞く耳を持たなかった息子さんを説得し続け、今は毎週末息子さんと県外で過ごしている。本当は転校しようとするまでに息子さんを説得したが、転校手続きがうまくいかなかったのだ。小中学生と違って、高校生の転校は難しいという現実もある。

対話して一緒に考えることが大切だ。

命の問題なのだから。

「相手を思いやる感覚は日本人は世界一だと思う。この感覚は外国人にはわからないだろう。」と彼女は言った。

確かにそれはこの狭い日本で暮らす私たちにとって大切な事実だ。

子どもだって友達のことやいろいろなことを考えてるんだと思う。

ただ、子どもの言い分だけを訊くのではなく、親は自分の考えも子どもに伝えることを放棄してはならないと思う。対話して一緒に考えることが大切だ。命の問題なのだから。

今や学校はまるで何事もなかったかのように子どもたちを普通の生活に戻そうとしている。子どもの未来を守ろうとしない学校。

それは、いじめや不登校やうつ病の子どもが増えていることと根っこでつながっていると思う。子どもの未来を守ろうとしない学校へ通い続けることに意味があるのだろうか、と毎朝娘を送り出すたびに考える。

職を賭す。

福島県 高校教員 赤城修司

- 1967 福島県会津坂下町生まれ
 1989 筑波大学芸術専門学群洋画コース卒業
 1990- 福島県会津若松市で Group M 展に毎年出品
 1994-1996 青年海外協力隊員で美術教師としてブルガリアに派遣
 2005-2008 福島民友新聞に育児 4 コマ漫画を連載
 2008- 新制作展（国立新美術館 六本木）に出品
 1991- 現在 福島県の高等学校美術教員

思いと全く正反対のことを言わなければならなかった。

事故直後から、福島市は子どもが生活しているいい環境ではないと感じていた。事故の全容も、放射能の最終的影響も、現時点ではわからないのだから、想定される最悪の事態を睨んで、予防原則に立つべきだと私は考えていた。しかし、4月に入ってみると、福島市は小中高ともに、ほとんど普通に学校が再開された。入学式を遅らせるべきだと主張する職員もいたが、「それはいつまでですか？」という質問に、誰も科学的に答えることは出来なかった。入学式の早期実施に反対する先生方に向かっては「職員が冷静さを欠いてどうしますか。今こそ冷静になってください」と教頭が言った。結局校長判断で、数日延期しただけで入学式が実施された。

入学式当日、私は、自分の子供を他県に疎開転校させたいという思いを持っていながら、入学した生徒に「入学おめでとう。これからがんばろう」と思いと全く正反対のことを言わなければならなかった。

その後も、放射線に関する問題は、職員会議に全く上がらなかったわけではない。しかし、私の感覚からすれば、かなり少なかった。昨年度、鳥インフルエンザであれほど騒いだのに、放射線がほとんど危険視されないのは、驚きでしかなかった。その理由は、放射線の危険性にわずかでも目を向けてしまえば、最終的には僕と同じ結論の全員避難になるからではないかと推測する。しかし、その結論は、「福島市は安全であるから避難の必要はない」という国の結論に対して真っ向から反対することになる。

それが恐ろしくて、触れられないのではないかと考えるのは妄想だろうか？

聞くところによると、「イラク派兵に反対してレバノン大使を辞任した」人物がいるという。作戦をどう行うかについて会議の場で発言することはできるが、作戦自体に反対するのであれば、その場を辞するしかない。同じように、学校をどのように運営するかについては会議で発言することができるが、学校運営に反対であれば、学校を辞するしかない。これが、教員から「子供の健康と命を守ろうとする」姿勢が見えない理由ではないだろうか。私の推測は、パニックによって歪められているだろうか？ PTSD になって冷静さを欠いているだけなのだろうか？

農薬・化学肥料に頼らない西日本中心の野菜専門の八百屋
野菜カフェはもる — 福島市新町 3-14 上州ビル 1F
 営業時間：11:00～18:00
 定休日：日曜・月曜・祝 Tel：(024)521-8670

★イベント情報★

12/1（木）14：00～ドーナツ作り定員 10 人
 12/2（金）14：00～酵素作り定員 5 人
 12/3（土）14：00～玄米の炊き方定員 10 人
 要予約 090-6553-1733（店長陶山）

子どもたちのリスクを最小限にするために、今できることを：

3.11 福島第一原発事故から 8 カ月を経て

西崎伸子（にしざきのぶこ）

福島大学行政政策学類。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科単位取得退学、2006 年から現職。専門はアフリカ地域研究。研究者らでつくる「福島乳幼児・妊産婦ニーズ対策プロジェクト」で情報発信などを担う

子どもとともに福島市に暮らすわたしもその一人である

豊かな自然が残る福島県は、3.11 の東京電力福島第一原子力発電所の事故で放出された放射性物質によってひどく汚染された。5 万を超える人々が国内外に避難したが、残りの大多数が、いまなお放射能汚染地域に暮らしている。子どもとともに福島市に暮らすわたしもその一人である。放射性物質の影響は大人の 3 倍あると言われる子どもたちをこの地で育てることは、それだけで重い十字架を背負っているようなものだ。だからこそ、子どもをリスクから守るということをあらゆる個人と組織があらゆる手段で考えなければならないと思うのだが、現実是对極のことが起きている。

事故当初、責任ある機関が情報を隠したことによって、多くの子どもたちは避難できず被ばくをした。4 月にはいり、国は年間積算量の暫定基準値を 20 ミリシーベルトという「有事設定」を決めたが、県と自治体は汚染の実態調査結果を待たないで、義務教育の授業を通常通り始めた。市民団体や保護者の怒りの声で、ようやく「1 ミリシーベルトを目指す」発言を 5 月に得た。しかし、学校の表土除去が本格的に始まったのは 7 月になってから。それまで 30 度を超える教室で窓を閉め切り、扇風機の設置もなく授業を受けた多くの生徒が体調を崩した。そして、夏休みにたくさんの仲間が転園（校）した。9 月になってから表土除去を終えた園・校庭で外遊びが再開されたが、通学路や各世帯の除染は手つかずで、子どもたちは今も室内での遊びを余儀なくされている。食品に含まれる放射性物質の国の基準値はいつ引き下げの議論がなされるのかわからず、給食や日々の食事に苦悩にしている。そして、外部被ばく（とおそらく内部被ばくの）積算数値だけが順調に増え続けている。

大人がこの問題を語るロジックはすべて「お金にまつわる話」だった

子どもたちが苦しんでいる間、大人がこの問題を語るロジックはすべて「お金にまつわる話」だった。表土除去はいくらになるのか、賠償はいくらになるのか、地方経済が疲弊してしまう等々。西欧近代化の波に追いつけ追いこせと、戦後日本は経済成長政策をすすめ、わたしたちの世代はその恩恵を十分すぎるほどに受けてきた。けれども、金銭に換算可能な「物質的豊かさ」と引き換えに課されたのが、とりわけ子ども世代に大きな負担を強いる「超高リスク社会」だったとすれば、その選択をした責任から大人は誰も逃れることはできないだろう。

だから、今回の事故の検証と責任の追及は必須である。しかし、ここで暮らしていると、今、わたしが目の前にいる子どもたちのためにできることが、たくさんあることに気づく。たとえば、避難・疎開・保養の機会を提供し続けること、食品の「子ども基準値」を自治体が主導してつくること、子どもや保護者目線の健康影響調査を信頼できる機関がおこなうこと、子どもを一時的でも避難させてから除染に全力を尽くすことなどだ。福島に暮らす人々は国に見捨てられたと思っている。

ローカルな状況を理解しているはずの県や地元の自治体ですら子どものリスクを全力で最小化する体制になっていない。地域経済の維持が優先される今の状況は、「あのときの選択の過ち」を再び繰り返すことにしかならないのではないかと。そう考えているのは、もちろんわたしだけではない。すでに立ち上がっている福島県内外の人々とともに、子どもたちのリスクを最小化する「いま、ここでの」活動を少しでも前に進めていきたい。こんな状況でも、笑顔で元気をくれる子どもたちは、わたしたちの本物の宝物だ、と改めて思う。

原発事故関連で、わたしがかかわっているプロジェクト

- ☒ 福島乳幼児・妊産婦ニーズ対応プロジェクト：<http://fukushimaneeds.blog50.fc2.com/>
- ☒ 福島大学災害復興研究所：<http://fsl-fukushima-u.jimdo.com/>
- ☒ 福島の子ども保養プロジェクト
- ☒ 「放射線被ばく市民調査」支援の輪プロジェクト：
<https://sites.google.com/site/hhstswproject0/oshirase>

今、思っ
てらる
ら、感
じっ
てらる
ら

西本 豊
(にしもと ゆたか)

大阪生まれ大阪育ちのサラリーマン。2010年春、企業に就職。その秋から福島県勤務となる。福島県にて、雪が積もる冬のこと、大地震のこと、原子力発電所の事故の怖さのことを学ぶ。

気温が下がってきていて、冬が近づいていることを実感しています。去年の冬は、生まれて初めて大阪以外の場所で生活をした。雪の降る町。北に向かえば確かに寒くなり、雪が積もり、生活が変わり、根付いている文化が変わることを感じる。雪が積もる町でも、年がら年中、僕らはどんな野菜も買うことができる。どこかに無理が生まれていないのか心配になってしまった。そんなことを考えつつ。

放射能が怖い。何が怖いって、何もわからないところが怖い。どのくらい被ばくしたら体に悪いの？ずっと風邪っぽいけど放射能のせいなん？放射能って何？放射能に弱い人とか強い人っておるん？それは調べたらわかるん？ほんまにわからんことだらけ。そして、わかっていることもある。放射能はつながりを断ち切るものであるということ。家族、コミュニティ、土地、歴史、文化、そして、いのち。たくさんのが失われた。

弱音を吐ける人がいないこと。

子どもと妻を北海道に逃がした家族。食事の面で家族の中でも起きる分断。言い出せない不安。これまで家で野菜を育ててご近所さんに渡してたけど、今では喜ばれないからもうあげることをやめたひと。コミュニティの分断・破壊。地域伝統のお祭りの開催の躊躇。小さな、これから大きく育っていくのちを守ること、子どもの疎開・後継者の不在化。分断はどこまで人を孤独に孤立に追いやるのか、今の僕では想像もつかない。そして、こういったことはマスメディア等では見えてきにくいこと、遠く離れたひとからは見えないこと。現地の人が一番身近に、一番深刻に直面している問題。解決する方法は見えてこないけど、それでも真剣に考えて向き合っ、勇気を持って少しずつでもことばにしていくしかない。

今の僕の個人的な悩みとしては、弱音を吐ける人がいないこと。でもこれは個人的な問題ではなくて、色んな場所で当てはまることやと思う。原発事故を受けて、放射能の問題っていう、これまでに向き合ったことのない問題に向き合わされている人たちがいる。新しく複雑で自分の中で答えも出ず、人に話すこともできない。人に相談すべきことなのか、自分の中で処理すべき感情なのか。そうやって自分の中に溜め込んでしまう。弱音を吐くためには、時間・場所・そして関係が必要である。大地震の被災、原発事故の被災、終わりの見えない問題、目には見えない危険、疲弊する中で何かをする余裕がない。多くのものが足りていない。奪い合うのではなく、求めるばかりでもなく、補い合う。そんな世の中にしていけないと。そのためにも、必要なのは誰に対してかもようわからん、がんばれって漠然としたことばじゃなくて、大変な思いをしてる友人・知人に対する思いやりの言葉。そんなことは思ったりする。

願うということは叶っていないということ。機会があれば被災地に住んでいる方の願い事をきいてみてください。

12.11 生活村

日時 12月11日(日)

時間 10:00~12:30

場所 福島テルサ3F

〒960-8101 福島市上町4番25号

▼子ども特区(3Fあぶくまの間)

<インストラクター>

TOMI翔(東京)行動するアーティスト

▼やさい村(3Fあぶくまの間)

米・野菜をカンパ制で!

▼小さな映画村(3Fあづまの間)

1.「フクシマからの風」

—第一章・喪失あるいは螢—

2. 福島的女たち経産省に座り込み記録DVD

▼テーブルトーク(3Fしのぶの間)

▼知識普及村(3Fロビー)

★当日お手伝いしてくれる

ボランティアスタッフ大歓迎★

主催:子どもたちを放射能から守る

福島ネットワーク

問い合わせ 090-6554-1979 (担当:椎名)

review 1

釜ヶ崎から 便り にも似た

釜ヶ崎の街歩きをとおして伝えたいこと

NP O法人ココルームスタッフ。自称闘う人類学者。まちあるきと
 岡本マサヒロ コーヒーとたばこと古本をこよなく愛する、釜ヶ崎のひと。

数多くの日雇い労働者が原発の建設や被曝をともなう メンテナンスの仕事にかりだされてきました

大阪市の南、通天閣で有名な新世界の南隣に釜ヶ崎は位置しています。この街は、東京の山谷や横浜の寿町とともに、日雇い労働者の街として知られました。しかし、1990年初頭より、日雇い仕事の数が激減し、労働者の数が減り、そして路上生活をせざるをえない人の数が増加しました。また、人口の高齢化がすすむにつれ、近年では生活保護受給者の数も多くなってきています。かつて日本の経済成長の下支えをしていたこの街は、現在では高齢者の街へと大きく変貌しようとしています。こうした釜ヶ崎に活動の拠点を置くココルームでは、この街に関心をもつ学生や一般の人びとを対象とし、釜ヶ崎の街歩き（スタディツアー）を実施しています。釜ヶ崎には、日本が抱えるさまざまな課題や矛盾が凝縮して存在しています。この街を知ることとおして日本社会を知ることに通じると、私は考えています。

311以降、原発での被曝労働の問題に関心をもつ人の街歩きへの参加が目立つようになってきました。これまで釜ヶ崎などの寄せ場から、数多くの日雇い労働者が原発の建設や被曝をともなうメンテナンスの仕事にかりだされてきました。幾重もの下請け・孫請け体制のなかで、末端の労働者らは賃金をピンハネされ、また何かあったときの責任の所在も明確でないまま、都合のよいように働かされてきたわけです。こうした事実、私は強い憤りを覚えずにはられません。釜ヶ崎の街歩きをとおしてこうした事実を参加者らが知ることは大きな意味があると考えます。

釜ヶ崎には、矛盾や問題点のみでなく、ポジティブな面も数多く存在します。たとえばこの街には、空き地に花を植えている男性が何人かいます。ある空き地は、行政の管理下にあり、周囲は金網のフェンスで囲われているため、中にはいることは許可されていません。しかし、60代とみられるその男性は、梯子を使ってフェンスを乗り越えて中にはいり、今年からそこで花を栽培しています。彼の栽培方法はユニークです。まず土作りが大事であると考え、どこからか古い畳を拾ってきて土に鋤き込みました。そして、立ち小用の簡易トイレをフェンスの横に設置し、通行人の小便をコンテナに貯め、堆肥づくりを始めたのでした。古畳と小便を混ぜた土はほどよく発酵し、肥えたよい土ができたようです。今年の春先には菜の花が満開となり、多くの人たちの目を和ませました。

私は街歩きのとときには、欠かさずこの花畑を案内します。私が街歩きでそこを訪れるのは、この男性の小さな取り組みが、エネルギーの循環という大きなテーマにつながっていると思えるからです。元来より人間は、身近にあるものを手間暇をかけて利用して暮らしてきました。たとえば、燃料に関していえば、雑木林の薪木を集めたり、木炭をつくったりして、煮炊きなどに利用してきました。しかし、このわずか数十年のあいだに、私たちは便利であることに慣れてしまい、労力をかけて身の回りにあるものを利用して暮らすということをすっかり忘れてしまいました。薪木や木炭の代わりに、便利な電気やガスを使用するように変化してきたわけです。こうした結果、私たちは原発の存在をも容認してきたのだと考えることができます。釜ヶ崎の街歩きが、参加したみなさんのこうした問題を再考するひとつの契機となったらよいと願っています。

埼玉川越 → 大阪西成

釜ヶ崎への疎開生活（1） 子どもの転校

絵：小手川こはる

小手川さんのコラム



小手川 望 (こてがわ のぞみ)

「4（よん）」主宰。演劇制作。埼玉大学経済科学研究科修了。1997年からプロデュース公演を手がけ「演劇の場で、観客が主体的に参加する作品」を目的として2001年に「4」を立ち上げ。2007年から「茶遊び」を開始。お茶とダンスの交換による演劇を制作している。私生活では、7歳の娘こはるとふたり家族のシングルマザー。

現在、ココルームにお世話になって釜ヶ崎で避難生活を送っている小手川といます。東日本大震災とそれに続く東京電力の原発事故をきっかけに、2011年6月から小学校2年の子どもといっしょに釜ヶ崎の中心地、萩之茶屋に引越しました。

3月15日、原発事故発生のニュースが流れてから3日後に、わたしたちは一時的に大阪に疎開するために埼玉県川越市の自宅を出発しました。その時は、まだ事故がどうなるのか全く分からず、春休みも近かったでの、とりあえず関東を離れようと考えていました。約10日ほど関西方面に滞在して、そのときココルームの上田假奈代さんに声をかけていただき、釜ヶ崎に疎開者として受け入れてもらうことになったのです。今は、ココルームが管理委託されている「支援ハウス 路木」に滞在させていただきながら、「路木」の一階で営業している「こころぎ」の運営のお手伝いをしています。

疎開を決めて、引っ越してこちらで生活を送るにあたり、さまざまなことがありましたので、記してみたいと思います。

□子どもの転校のこと

釜ヶ崎に引っ越すにあたり、まずは小学校2年生の娘にそのことを相談しました。

子どもは、3月に疎開している時に訪れた高野山で「地震と放射能で大変な思いをしている人たちが早くそれが終わりますように」とお祈りしていて、わたしが思っていたよりも、ずっと状況を理解しているようでした。ですから、「大阪に一時的に避難しようと思う」というわたしの話はわりとすんなりと理解してくれたように思います。いずれ川越に帰るのなら、転校してもいいとすぐに賛成してくれま



←こはるちゃんが作った「まねねこコラム」

そして、その時点では疎開するのは一学期まで、7月後半までの予定だったので、住民票を移さずに転校できないかと思い、西成区役所に相談に行きました。大阪市は、政令指定都市なので教育に関することは各区に問い合わせるようにいわれたからです。西成区役所では、住民票を移さずに転校することは可能で、「前の学校で在学証明と教科書給付証明書をもってきてくれば、すぐに転校手続きができます」といわれました。次の日から学校に通えるとのことでした。

転校元の学校との話のほうがもう少し大変でした。まず、転校予定であることは1ヶ月前に通知する必要があります。そして、住民票を移さずに転校する手続きをしたことがある人がおらず、校長先生と教頭先生から、数回電話がかかってきて「住民票を移さずに転校することはできないと思います」と告げられました。そして、教育委員会にも確認する必要があるということでした。

そのため、西成区役所と転校先の学校に何回か電話をかけて、手続き可能であることを確認し、転校元の学校の教頭から直接、西成区役所と転校先の小学校に電話をかけてもらい、やっと転校手続きをしてもらうことができました。転校元の先生が手続きになれていない場合、手続きに手間取ることもあるようですが、受け入れ先が大丈夫といってくれていれば可能なようです。

そして、学童保育には入室手続きをしたのですが、後になってから学校に在学していないのに学童にだけ在籍することが出来るか、学童保育の保護者会で協議してもらうなどそちらも手続き面で手間取ることがありました。学童保育は一回退室するともう一度入室手続きが必要になりますし、もう一度戻る可能性がある場合、運営委員の方と早めに話し合ったほうが良いようです。

住民票を移さない、ということはその自治体には税金を払わないということですから、それでも子どもを受け入れて教育をうけさせてもらえるというのは、非常事態でも子どもの教育が継続することが大事にされていることであり、とてもありがたいことだと思います。転校先の小学校は全校生徒数が少なく、2年生は13名という少人数でした。子どもは学校中の子から名前を覚えてもらったようです。最初はなかなか友だちもできなかったようですが、1ヶ月過ぎたあたりからだんだんと慣れていくことができました。

そして、大阪市は「いきいき活動」という独自の放課後子どもの居場所事業があり、学童保育の手続きをしなくても保険料500円だけで5時まで毎日放課後子どもをあずかってくれる制度があるので、とても助かりました。

次回以降では、釜ヶ崎での毎日の暮らしのこと、ココルームでの子どもの様子などを記したいと思います。



転校先の小学校で運動会に参加するはるさん

撮影：小西 六

マサオさんに聞く

マサオさん

顔をくちやくちやにして話してくれた山田マサオさん(62歳)。アイスコーヒーをカラカラと飲み干すと帰って行かれました。

マサオさんは釜ヶ崎でアルミ缶や段ボールを集め、トクソウ(高齢者特別清掃事業)などの仕事をして暮らしています。組合活動にも熱心に参加され、反原発や沖縄基地問題などのデモや集会などにでかけ、地域内の活動にももくもくと参加されます。その姿は静かです。

山田洋次監督の映画「おとうと」では、段ボール集めをしているマサオさんの前を吉永小百合さんが通って行きます。2011年、谷川俊太郎さんがマサオさんの詩をつくりました。

<http://www.direction-dcord.com/2011/11/10233817.html>

質問：マサオさん、反原発のデモや集会、熱心に動いてるけど、理由は？

マサオさん：うーん、うーん、ちょっとわからへん

質問：福島の人たちに語りかけたいことは？

マサオさん：やっぱり、やっぱり、被ばく、のこと、しんぱい

質問：福島のこどもたちには？

マサオさん：こどもたち。やっぱり、、なんていうたらいいんか、、やっぱり、心配やな

質問：沖縄の基地問題と福島の原発、共通点はありますか？

マサオさん：うん、、共通点、あると思うな

質問：マサオさんがこれらの問題に動かされるのは、本能的なものでしょうか？

マサオさん：うん、そうやな。本能的

質問：原発についてはどうですか？

マサオさん：人間がながく、やっぱり、どういうたらええんかな、なかよく生きていくためには原発はなくなったほうがいい

質問：マサオさんにとって原発にかかわることは大事なの？

マサオさん：大事なの。ぼくはな、なんかもうわからへんけどなあ、どういうたらいいかわからへん、な。

デモ行ったり、集会行ったり、ぼくがこういうこと行きだしたのは八年前の空港問題から

質問：これからもデモ行ったりしますか

マサオさん：うん、うん

質問：マサオさん、健康でいてくださいね。デモ行ったりするためにも

マサオさん：うん、うん

原発労働者のまち 釜ヶ崎から

原発俳句

目に見えぬ放射能 未来ない

甲状腺 腫れてだめよね 東京電力

原発を許した俺も 罪がある 心登

後藤

review2 またどこかでね 事務局から

とんでもない世界で それでもなんとかあきらめずに それを越えていく想像力を

原田麻以

1985年東京生まれ東京育ち。NP
O法人ココルームスタッフ。2009
年、釜ヶ崎にてカマン！メディア
センター立ち上げ・運営を行う。
2011年9月より拠点を東北にう
つし、ココルーム東北ひとり出張
所として福島・仙台に身を置く。
明治学院大学平和研究所研究員。

9月、2年間お世話になって働いた大阪西成区通称「釜ヶ崎」を離れ、福島に関わることを決めました。ひばく
のリスクを軽減するために、住居は仙台に、そしてそこから高速バスで約70分かけ福島へ通っています。
わたしは、放射性物質に敏感な体質のようで、仙台から福島へ向かう車の中でだんたん声が枯れてゆきます。
はなしを聞いただけの多くの方は、考えすぎなんじゃない？と言いますが、何度もその道すがらを共にしている
人は、そんなわたしのようすと出会い、回を追うごとに、そこに見えない放射能を見ているような感覚になるこ
とがあります。

わたしは、福島で子どもたちを放射能から守る福島ネットワークに関わり、できるお手伝いをさせていただきな
がら、事務局に身を置くことで、訪れる福島の人の声を聴き表情を知りながら現状に実際に触れ、その状況のぼ
んやりとした輪郭のようなものでも掴むことができればと日々過ごしました。よそ者が急にになにかするのはむず
かしい。まずはともかく現状把握をするために「そこに身を置く」ことをしていました。

事務局に通う中で、事務局には地域の方よりもおそらくたくさん取材の方、ドキュメンタリー映像を撮られて
いる方などが来られていました。そこで、子ども福島の佐藤幸子さんがことばにしていたことが、印象的でした。
「放射能に色がついていたらよかったね、と言ってるんです。赤とか色がついていたら、みんなそこから逃げるで
しょう。でも見えないしにおわないし感じない。よほど意識していないと、放射能のことはどんどん意識から薄
れていってしまう。危険だという感覚がマヒしてしまう。だからイメージの力が大事なんです。想像すること。」と。
先日、鷲田清和さんがある新聞に「想像力を鍛えておく、いつか耳を傾けられるように」という題名で東日本大
震災に関連した記事を書かれていました。その記事を拝見する前わたしは、気がつけば大学の講義で同じような
ことについて話をしていました。

わたしと同じ年の友人が「でも、電気がなくなったら日本の経済がダメになるでしょう。だから仕方がない。」と
いうようなことを言いました。彼女は、何も知らずにそういうことを言っているのではありません。チェルノブ
イリのこと、放射能の怖さも知っていて、自分はガン保険に入ることにすると言っていました。東京の大手企
業で働いている彼女には、自分を守るお金があり、知識もあり情報も手にしています。でも、福島で鼻血を出し
ているこどものことが想像できないのだと思います。眼の前でいのちの話をしている、そこに想いを馳せられない。
想像がつかない。

釜ヶ崎で活動してきたときにも、釜ヶ崎のはなしをするとまったくわからない、という人は多く、「良いことして
ますね、すごいですね。」と手も触れられないような遠く山の頂あたりから、こちらに手を振るように声をかけら
れる経験を多くしてきました。それは、「わたしは絶対に関わらないし、関係のないことだけれど、がんばってね」
という態度のように思え憤りさえ感じてきました。釜ヶ崎は、「透明な壁に囲まれた地域」という比喩をよく使う
ような、近くに住む人でさえ立ち寄らず、まして関西以外の地域でこの地域の話をする際には、本当に「自分か
ら遠くの世界の問題」という風にみられてもある程度割り切らざるを得ない感覚をもってきました。しかし、今
回福島第一原発の事故は、現在事故から8ヶ月が経過したに過ぎず、事故はまだ終息していません、線量は揺れ、多
くの地域が当事者として放射能の雨や雪を浴び、汚染の大地と向き合わざるを得なくなりました。

それでもなお、他人事として、想像力なく、イメージを切り離し、「仕方がない」と言う人が世界の中心を担うような状態に途方もない虚無感を抱きます。わたしたちの、想像力は骨抜きにされているのだと思います。教育や経済社会が骨を抜いて行っているのでしょうかけれど、かつて「自然」に見えないかみさまの姿さえ見てきた感覚、闇に妖怪を見、狐に化かされてきたわたしたちが、かみさまを殺し森を開き、山を削り川を埋め、きつねを殺し、闇を消し、発展してきた末に、もはや自分のすぐ傍らにある、「いのちの手触り」までも想像することができなくなってしまったのかもしれない、と思います。それは自分のいのちを殺す行為のように思えます。

先日、福島のおかあさんたちと、福島南部の白河というところで行われた「水俣展」を見に行ってきました。そこには水俣病の原因となった有機水銀を工場から垂れ流していた、企業「チッソ」の社長のことばがありました。「そのときのわたしは、人のいのちよりも、会社の経営の立て直しに邁進しておりました」と。この人に、ほんの少しの想像力があれば、と思います。60年前の水俣の問題と、今の原発事故の問題は変わったところを見つけることの方が難しいほど、酷似していました。となりで見ていた福島のおかあさんは、このことばを見て「とんでもないな」の一言でした。

この、とんでもない世界で、それでもなんとかあきらめずに、それを越えていく想像力を、ギリギリのところまで失くさないようにしたいと思います。

今回、記事を書いてくださったすべてのみなさま、本当に忙しい中、ギリギリの依頼を受けてくださったみなさま、本当にありがとうございました。さまざまな方に協力いただいたのは、さまざまな方が「また どこかで」存在し合い、そのどこかでつながりつづける問題とそれぞれに向き合っていくことを想像するものにしたかったからです。「また どこかで」は、政治社会学者の栗原彬さんが、水俣病について書かれた著書「存在の現れとしての政治」の中でおっしゃっていたことばからいただきました。

釜ヶ崎も福島も、水俣もそれ以外のすべての場所がつながっていて、そしてまたどこかでそこにあるあなたに出会いたい。創刊で終わってしまわぬよう深呼吸して次号について考えます。どうかみなさまの想いを聞かせてください。よろしくおねがいします。

ココローム
Cocoroom とうほくしゅうちやうじょ
東北出張所

福島県福島市新町 8-8 明邦ビル 3 階

(事務局在中場所)

TEL : 090-6553-1633

Email info@cocoroom.org

ブログ : <http://cocoroomtohoku.jugem.jp/>

NPO法人ココローム

〒557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11

TEL : 06-6636-1612

HP : <http://www.cocoroom.org/>

カマン！メディアセンター

〒557-0001 大阪市西成区太子 1-11-6

寄付について

ココローム東北出張所では活動に寄付をいただいております。

ゆうちょ銀行 記号 14170-26010651

口座名義 とくていひえいりかつどうほうじん

こえとことばとこころのへや

特定非営利活動法人

こえとことばとこころの部屋

ココローム東北新聞 2011年11月号

また どこかでね

2011年11月25日 発行

12月3日 改定再発行

発行人：原田麻以（NPO法人ココローム）

協力：子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク

明治学院大学国際平和研究所